

講演会記録

愛知学院大学心身科学部心理学科 心身科学会講演会

「虐待を受けた子どもへの援助を考える」講演概要

日時：平成22年11月2日（火） 13：30～15：00

場所：15201教室

講師：遠藤野 ゆり（山口大学 講師）

被虐待経験を抱える就労児童の自立支援施設である、児童自立援助ホームにおいて、自分自身が捉え難くなるという思春期の苦悩にある子どもたちはどのような在り方をしているのか、また養育者は子どもたちといかに関わるのかを、サルトルを手がかりに考えたい。

まず、子どもたちの他者経験について考えたい。被虐待という過酷な環境で育った子どもたちは、他者に対して過度の攻撃性を発揮したり、他方で不適切なほど接近していわゆる甘えを表出したりするなど、他者経験の基盤が極めて脆いといわざるをえない。中でも今回取りあげる、ネグレクトされ、戸籍さえ持っていない或る少年は、他者に対する構えが非常に不自然な硬さを帯びていることが何気ない振る舞いにも現われる。通常、施設で暮らす子どもの自立においては、日常生活を滞りなく過ごせる経済観念や家事能力といった様々な技術や、職業上のスキルや、他者と適切な仕方で関われる社会性といった、様々な社会的スキルの獲得が問題とされる。ところが、この少年は、ホームで生活し始めた当初から、一見するとそうしたスキルを体得しているにも関わらず、そばにいる者の気分が沈んでくるような、何か普通ではない重苦しさを漂わせていた。この少年の振る舞い方の不自然さを詳しく考察すると、サルトルが「自己についての非定立的意識」と呼ぶところの、いわば無意識的な仕方で自分のことを常に問題とせずにはいられないという、通常我々の意識が本来的に備えている機能が、十全には働いていないことが明らかになる。

次に、子どもたちが、他者との関わりを経て、自らに向き合う様を考えたい。ホームの子どもたちにおいては、被虐待という辛い事実といかに向き合うかが、大きな問題となる。あまりに辛い過去であるがゆえに、子どもたちはしばしば、自分の経験に関して、虐待をしつくと捉えようとしたり、仲睦まじい理想的な家族と捉えようとしたり、あるいは過去についての記憶が一部欠損したりしている。こうした捉え方は、自立後も家庭への再統合を期待できないホームの子どもたちにとっては、かえって、家族関係内での傷つき経験を増長させてしまうこともある。今回は、特に或る少女に対して、養育者が、通常の施設養育方法とは異なり、その子自身の被虐待経験を指摘する、という出来事を考察する。辛い事態から目を逸らそうとすることは、実は、その出来事を強く意識することでしかないということから、過去からの逃避によってかえって辛さを味わう少女が、過去を見据えることによる辛さいかに耐えていくのかを捉え、虐待を受けた子どもたちにとって、過去はどのように乗り越えられるのかを、サルトルが「自己欺瞞」と呼ぶ観点から考えたい。

最後に、子どもたちにそうした働きかけをする養育者の在りようについて、考えたい。養育者は、辛い過去に向き合おうとする子どもたちを支える中で、子どもの辛さを自分自身の辛さのように感じざるをえない。また、子どもたちには引き受けがたいほどの辛さは、養育者にぶつけられることによって、耐え忍ばれていくが、養育者自身は、子どもたちのそうした振る舞いをも受け止めなければならない。それらは、子どもたち自身のために、という養育者の強い想いでなされるにもかかわらず、子どもたちが、養育者の働きかけをふさわしい仕方で受け止め、自立した後もそれらを受け止め続けていってくれるかは、養育者にはコントロールできない。自らをすべて投げ出しながら、拒否をも含めた相手の受け止め方に委ねざるを得ないという養育者の倫理が要求されるこうした支えによって、己自身では受け止めがたい問題にぶつかる少年の実存が支えられる様子を捉え、こうした諸考察を通し、虐待された子どもたちを支えるとはどういうことなのかを考えたい。

「人間栄養学について」講演内容

日 時：平成23年1月7日（金）9：30～10：50

場 所：7203教室

講 師：中村 丁次（(社)日本栄養士会会長，神奈川県立保健福祉大学保健福祉部長 教授）

世界では現在も深刻な低栄養問題を抱える国が多いが、わが国でも第二次大戦後は大変に貧しく、食べ物のない時代があった。わが国では当時の低栄養問題に対して、国を挙げて「栄養改善活動」に取り組み、見事に解決した歴史があり、先頭に立ってその大きな役割を果たしたのは栄養士である。

そして現在では、国民の誰もが、栄養素の1つである「ビタミンC」を知っており、ビタミンCは食品の何に含まれているかを尋ねると、誰もが「かんきつ類」と答えるほど、国民が栄養に対する知識を有しているのがわが国日本である。しかし、このような国は他になく、敗戦後の栄養改善活動が成功したのも、背景として大正時代に、わが国で医学から栄養学を独立させ、栄養士の養成や栄養士制度の発展に貢献した栄養学者（佐伯 矩）の存在があったからである。

その後、高度経済状態が進むにつれて食生活は豊かに、国民の栄養状態は欠乏から過剰へと大きく変化し、さらに多様化、つまり生活習慣病をはじめとする「過剰栄養」と、高齢者や傷病者、および若年女性のやせ等の「低栄養」が混在する時代へと変化した。20歳以上の男性の4人に1人、女性の5人に1人が肥満（ $25 \leq \text{BMI}$ ）であるが、20代女性の5人に1人が $\text{BMI} < 18.5$ のやせである。また、内臓脂肪蓄積が原因とされるメタボリックシンドロームが疑われる・強く疑われる者は男性の2人に1人、女性の5人に1人であり、一方、入院患者や老人ホーム入居者の3割以上が低栄養リスク者である。

このように、栄養問題は多様化、複雑化、個別化し始めたことにより、21世紀に求められる栄養学は、食物に含まれる栄養素などの食物側から栄養を考える「食物栄養学」から、人間の栄養状態の総合的な評価・判定（栄養アセスメント）を行うなど人間側から栄養を考える「人間栄養学」に基づいた栄養管理（個への対応）と変化した。

管理栄養士は栄養アセスメントができて、適切な各種栄養補給法が選択でき、リスクの高い場合には、必要に応じてNST（栄養サポートチーム）などの医療チームに参画し、絶えず他職種との連携を図りながら、栄養の専門職として対応できる力が要求される。食事の栄養管理のみならず、人間の栄養管理を行う者として、船の舵が切られたのである。管理栄養士の最終目標は、単においしい予防食や治療食を作るのではなく、対象者の栄養状態、健康状態をよくすることであり、求められるのは、その知識と技術である。栄養の力により、人間が人間をケアするのであるから、専門職としての条件を備えていなくてはならない。そこでは、公益増進に対して全力で貢献する意志を公約し、その見返りに専門職に対する自律性と自己規制の特権が与えられるのであり、専門職としての条件は、公に職業人として社会の存続と発展に寄与する専門的能力（科学技術を生活に利用する能力→科学的エビデンス）を身につける+規範順守の適正（法令と倫理の順守→コンプライアンス、人格）を備えることである。

食べ物があふれ、いつでも、何でも食べられる社会は、栄養問題の終わりを意味しているのではなく、新たな課題を生みつつある。少子高齢化、環境問題が深刻化する中で、わが国の栄養問題は、多様化、複雑化、個別化しながら、保健、医療、福祉の領域で益々重要な課題になりつつある。管理栄養士は、再度先頭に立ってこれらの問題解決のために役割を果たす必要がある。

- 1) 「健康・体力の維持・増進を目指した現行の運動処方果たして適切か？」
- 2) 「栄養と運動による筋タンパク質合成の促進」(概要あり)

日時：平成23年1月12日(水) 11:10~12:40

場所：7503教室

講師：1) 大平 允宣(大阪大学医学系研究科適応生理学研究室 教授)

2) 中井 直也(同 准教授)

骨格筋はアミノ酸の摂取量と機械的な刺激に応じて、大きくもなれば小さくもなる。そもそも人体は60%の水と20%のタンパク質、そして残りの20%が脂肪等といったものによって構成されている。タンパク質は、筋肉や臓器を構成している。筋肉は、常に合成と分解を繰り返し、16日間で約60%のタンパク質が入れ替わる。したがって、筋量が増加するには、筋タンパク質の合成が分解を上回る必要がある。この合成を促進させるのに、食事やレジスタンス運動が関与する。

筋量を増加させる食事(栄養)については、一般成人では体重1kgあたり1.1(g/日)、スポーツ選手では体重1kgあたり1.5~1.8(g/日)のタンパク質摂取が必要となる。これ以上の摂取は、体内に体脂肪として蓄積されるだけでなく、腎臓や肝臓にも負担を掛けてしまう。さらに、摂取するタンパク質については、量だけでなく、質も考慮する必要がある。タンパク質は20種類のアミノ酸がつながった鎖状の造りをしており、人体の筋肉のアミノ酸組成に類似したタンパク質を含む食品摂取が効果的である。一方、生体内で合成できないアミノ酸を必須アミノ酸(8種類)といい、食事から必要量を摂取する必要がある。特に、ロイシンの摂取がタンパク質合成を促進させるシグナルとして作用する。それでは、その摂取のタイミングについてはどうか。運動前や運動時でのアミノ酸(特にBCAA:バリン、ロイシン、イソロイシン)の摂取について、運動前の摂取は運動によって高まる筋のタンパク質の分解を抑制する。さらに、運動時に血中アミノ酸が高い場合、エネルギーとして優先的に利用される。一方、運動後のアミノ酸摂取(BCAA)は、成長ホルモンの分泌に相まって、筋タンパク質の合成を刺激し促進させる。また、アミノ酸は筋タンパク質合成のための材料となる。

筋量増加と運動との関係については、レジスタンストレーニング後のp70S6Kのリン酸化の上昇に伴い、筋力および筋量が増加する。また、タンパク質合成を促進させるシグナルは運動量に依存することから、タンパク質合成を促進させるためには、レジスタンストレーニングの量に依存するといえる。さらに、筋タンパク質合成はトレーニング内容に応じて影響を受ける。レジスタンストレーニング後にスプリントトレーニングを実施した場合、スプリントトレーニング後にレジスタンストレーニングを実施した場合は、タンパク質合成を促すシグナルの上昇に違いがみられる。タンパク質合成シグナルを上昇させるためには、レジスタンストレーニング後にスプリントトレーニングを実施した方がよいことから、レジスタンストレーニングは別のトレーニングと分けて行う方が好ましい。

最後に、タンパク質合成を促進させる栄養と運動との関係について、BCAA摂取により、血中アミノ酸濃度を高めながらレジスタンストレーニングを行うことが重要である。(文責 水藤 弘史)

平成23年度 公開講演会

文部科学省

平成21年度大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム

生活習慣病予防指導教育体制の構築

——大学連携の重要性——

【日 時】 2011年7月9日（土） 13：00～16：10

【場 所】 愛知学院大学 けやきテラス

【プログラム日程】

挨拶 佐藤 祐造
(東名古屋地域生活習慣病指導教育連携センター運営委員会委員長、
愛知学院心身科学部・健康科学科客員教授)

特別講演1 (生活習慣病からの視点) 13：00～14：00
「糖尿病およびその合併症の予防と生活習慣」
講師：曾根 博仁 (筑波大学大学院教授)
座長：佐藤 祐造 (愛知学院大学客員教授)

特別講演2 (連携事業からの視点) 14：00～15：00
「事例教材(モジュール)を用いた専門職連携教育(IPE)について」
講師：遠藤 和男 (新潟医療福祉大学教授)
座長：大澤 功 (愛知学院大学教授)

特別講演3 (FDからの視点) 15：10～16：10
「学生に本当に役立つ教育をするために
—援助のプロを育てるにあたって大切なこと—」
講師：古宮 昇 (大阪経済大学教授)
座長：佐久間清美 (愛知県立大学教授)

【講演会参加人数】 375名

主催：東名古屋地域生活習慣病指導教育連携センター

共催：愛知学院大学・愛知県立大学・愛知医科大学